

シベリア抑留で

「二十五年」の判決を受ける

別府大学文学部

元教授 加藤 一英

【第一部】

私の最終学歴は、県立三重農学校であります。同校卒業（昭和十一年）後、暫くは郷土で燻ぶっていた。それが思いがけず、人生の転機が訪れたのは昭和十三（一九三八）年一月、赤紙（現役の召集令状）が届いたことからです。

私が入隊したのは当時、満洲に駐屯していた関東軍第二独立守備隊という部隊です。入隊後、幸運にも甲種幹部候補生に合格、予備士官学校（当時、関東州の旅順）で一年余り幹部教育を受けたのです。そこで、初めて所属した班はまさに多士濟々、天下の秀才といってよいような、たとえば東京



帝大・東北帝大・一橋大学・東京外語大など、もちろん少数ですが在籍していたのです。

この人たちに接するに及び、私がいかに田舎坊で無学蒙昧であるかを思い知らされ、それはまた反射的に、私の向学心をいや応なしに掻き立てたのであります。

私は日曜日の外出時には、よく旅順新市街の小さな古本屋に立ち寄った。初めて購入した書籍は、忘れもしないパスカル（仏哲学者一六二三〜六二年）の『瞑想録』、それにケーベル（独哲学者一八四八〜一九二三年）の『随想録』です。両書は、当時の私の学力では、到底、歯の立つようなものではありませんでした。

昭和十四年七月、幹部（将校）教育を終了した私は原隊に復帰。その後、東満洲から北満洲にかけて、専ら「匪賊（馬賊とも）討伐」に従事した。駐屯地ではもちろん、討伐中でも背囊の底に常に二、三冊の本を忍ばせ、宿営地に着くや、行軍の疲れも

忘れて読み耽るのが無上の楽しみでした。当時、読んで忘れられないのが、これまた難解極まる哲人カント（一七二四〜一八〇四年）の『純粹理性批判』、それにデカルト（仏一五九六〜一六五〇年）の『方法論序説』などでした。

昭和十八年三月、関東防衛軍参謀付き電信班長として新京に着任。当然のことのように、私は、毎日官舎への帰途、本屋を回るのを楽しみにしていたが、哲学書以外でも数学・物理学・生物学など矢継早に買いあさり、その数は優に千冊を超えるまでになっていました。

その頃、読んだ哲学書では、京都大学の西田幾太郎博士（一八七〇〜一九四五年）の不朽の名著『善の研究』を挙げねばならないでしょう。この本は、私の知的探求心をこよなく揺さ振り、爾来、これを契機に西田哲学にしだいに傾倒していったのです。とにかく軍隊生活で、戦地にあつて朝夕「死」に向き合っていた身ですから、必然的に軍務への精励より、深遠な「哲学の世界」へと逃避していたことは否定できない事実でした。

敗戦、そして武装解除からシベリア抑留へ

昭和二十年二月、防衛軍司令部から関東機動第一連隊

の中隊長に轉任した。同年八月、部下中隊を引率して陣地構築中、突如として八月九日夜半、ソ連は日ソ不可侵条約を一方的に破棄して国境を越えて侵入、私どもは同地で敗戦を迎えた。八月二十四日武装解除を受け、同十月十二日東満洲国境から入ソしたという次第です。

ところで入ソに当たり、幸か不幸か、私は数冊の愛読書を携行しており、これを廃棄するに忍びないことから、戦友に貴重品の衣料を惜しみなく分かち与えて、持ってもらった。

帰国までの十二年間、抑留生活の中で読書にどれほど慰められ、励まされ、かつ生きる希望を与えられたか。それは後述するとおり、計り知れぬものがありました。

最初のラーゲリは「ラーダ」收容所

貨物列車（二段カイク棚式）で四十日にもおよぶシベリア広野の旅で到着したのが、ラーダと呼ぶ收容所であったのです。

この施設は、独ソ戦で急拠築造された旧兵舎で、洞穴の中に丸太を組み建てたお粗末な代物。電気もなく、夜がくると一斉に毛布にくるまり寝た。それはよいが、眠り始めるや否や、今度は南京虫とシラミ（虱）の夜襲で

す。特にシラミは肌着の縫目に卵を生みつけ、二、三夜で孵化。眠れぬことから全員起き出して、しらみ取り競争”。一人百匹以上いたことは確かで、爪先で潰すと爪が真赤になり、取っても取っても絶えない。肌着を煮沸しても、翌日はまた同じといった状況でした。

人間は死が近づくと体温が下がることからか、まるで予期していたかのように一斉に移動を開始。血を吸って満腹した群れの引き越しは無気味です。これも、シラミが生き抜くための保身の術を本能的に持っていたからでしょうか。

食事といえば、戦争下捕虜の国際規定（ジュネーブ協定？）とかで、一日三五〇グラムの黒パン。スープは、カーシャと呼ぶ薄汁の粥かゆのようなもの。こうした粗食に加えて長距離行軍の疲労から、私は栄養失調に倒れ、二週間ほど名ばかりのラーゲリ内の病院に入院したのです。

文化活動が起こり、私も加わる

生活が少し落ち付くと、ささやかな文化活動が始まる。アクチブ（民主化運動の活動分子）が「壁新聞に出したので何か書いてくれないか」という。断わり切れず、当時私が傾倒していた西田哲学について書くことにしま

した。この一文が、私の生まれて初めて書いた哲学の論文でありました。

この壁新聞には、他に短歌・俳句・川柳、それに随想などがあり、こうしてラーゲリ内でも明るい文芸の火が灯された。一方では演奏会や音楽会、さらに演劇会などもあって、次第にラーゲリ内は明るい兆しが見え始めたのであります。

昭和二十一年七月、文化クラブ主催の二つの文化講演会が企画されました。一つは「日本の仏教彫刻について」他の一つが、私の「西田哲学について」です。この論文の執筆と発表は私にとり貴重な、かつ思い出深い体験となる一方、これが後のソ連軍事裁判での重罰に繋がることは、神ならぬ身の知る由もない、ことでした。

再びラーゲリ移動、ダモイか……

同年七月中旬、私たちは再びカイコ棚列車の人となり、若しかすると「ダモイ」（復員のための帰国）ではないか、と一縷いちるの希望を託したがみごとに裏切られ、着いた駅はキズネールという小駅でした。

ここで再び炎天下の行軍開始。文字どおりシベリア広野は広く、行けども行けども草原と丘陵ばかり、その中

に点々と集落が見える。炎天下に加えて書籍の入った背囊が肩に喰い込み、まさに「死の行軍」……。

野宿しながら数日後の夕刻、とある小高い丘陵地に立った。その途端、ボルガ河（支流）が見えるではありませんか。この支流に沿って開けた港町が「エリブカ」です。帝制ロシア（ロマノフ王朝）時代には、宗教の町として繁栄していたが、革命政府（第一次世界大戦末期）になって急速に衰退し、その名残りの建物が五つの教会で、金色に輝やく「クルスの塔」（十字架、ギリシヤ正教）が絵画を見るように望見されました。

しかし、これらの教会施設も「無用の長物」として倉庫代りに永年使用されてきた、という。ソ連邦解体の今日、これらの教会は復活しているのではないのでしょうか。同僚の詠んだ

天地の 嘆きの極を 越えければ

ボルガの河は 白く光れり

の短歌は、この時の情景を巧みに詠んだ秀歌でしょう。作者は元僧侶で歌人、気の毒なことに帰国後、暫くして入滅したとのことでした。

文化活動、盛んとなる

ところで、このラーゲリにはA・B二つの施設があり、私が入所したのはBの方です。

通常、ソ連のラーゲリは二重の鉄条網とか板塀に囲まれ、四隅に警備兵が見張る望楼台があるのだが、このBラーゲリにはそのような物はなく、高い煉瓦塀で囲まれていただけです。

所内には、二階建ての大きな家が一軒、他に四つほどの木造小家屋があり、電気もついていて、以前のそれに比べて比較にならぬほど立派でした。また、収容された俘虜も全て旧将校で、他に樺太庁と満洲国政府の要人、数名がいただけです。

さて、ここでも生活が落ちついてくると、再び文化活動が復活し、クラブ活動責任者に選ばれたのは温厚で人格者の民法学者・福島正夫氏（帰国後、学士院賞受賞。さらに東大・早大の教授に）でした。

その後、文化活動推進のために「文化委員会」が発足、私もまた委員の一人に選ばれた。お陰で一切の労働から解放され、毎日クラブの部屋で研修に従事、その成果を発表すればよく、私には「願ったり、叶ったり」のポス

トで、恐らく俘虜としては最良の環境と思われた。だが帰国後、知り得たところでは、国際捕虜条約により「将校は就労しなくてもよい」旨、定められていたという。

実は、この期間こそ、ソ連当局のワナ（謀略）で、先に記述したように刑罰を加えるための前段階の「思想調査」だったのです。私は迂闊にも、その陥穽にうまく嵌ったのです。だが、それを知ったのも後の祭りでした。

冬季大学講座で講義する

この頃、文化委員会主催の最大の行事は「冬季大学講座」でした。この講座には、哲学・社会学・経済学・自然科学などの領域が開講されていた。

哲学部門での担当責任者は私です。全く無名の、しかも拙劣な内容にも拘らず、講義場の大部屋は聴講者で溢れ、部屋に入りきれないほど。祖国の未曾有の敗戦が向学心に落している陰影の濃さを垣間見る思いがしたものです。

研究報告の内容としては、ヘーゲルの観念弁証法、マルクス唯物弁証法、それに西田哲学の絶対的弁証法といったもの、です。

ところで発表するに際しては、ラーゲル内での「お目付け役」ともいえるべき政治部将校に講義内容（概要）を説明し、必ず「諒承」を取り付けることが必要でした。

この収容所での政治部将校はマウレルという名の元ドイツ兵捕虜。ソ連共産党幹部に洗脳された優秀な人材と見受けられた（だが一皮むけば、陰険な人物であることの後刻知った。戦時下東京でスパイをしていた新聞記者・ゾルケのような人物）。私の事前説明には「イエス」とも「ノー」とも意思表示せず、全く言葉少なでした。

用紙不足に泣くー新聞紙の余白を利用

私が収容所内で発表した諸論稿は、全て手書きの文章形式で、その論稿は希望者には自由に貸出しました。学問に飢えていた聴講者たちは、貸出し日には長い行列ができたほです。

ここで是非とも触れておかねばならない点は、文章を書くのに必要な「用紙」のことです。ラーゲル内では用紙購入の金もなく（レポートの代価は支給されず無償労働）、手製で用紙を作る以外は方法はなかったのです。

そこで着目したのが古新聞。ソ連当局が日本兵俘虜洗脳のために発行していたプロパガンダ紙『日本新聞』です。

配布しきれぬほど大量の新聞の余白を手別けして全部切り取り、これを繋ぎ合わせて適當の大きさの西洋紙を作り、これに原稿を書くのです。

こうした形で、ラーゲリ内の文化活動に私なりに貢献しえたと、当時は秘かに自負していました。記述に当たり、万難を排して持ち込んだ背囊の中の書籍が、いかほど大きな力を発揮したことか。それは、ここに記述するまでもないでしょう。

また軍隊入隊後、寸暇を惜しみ身に付けた読書知識の集積があればこそ、こうした形で花咲こうとは思っていませんでした。人間の運命や縁とは、誠に不思議なものです。もっとも、その同胞への奉仕と学習への情熱と喜悅とは長くは続かず、ソ連当局の陥穽のとりことなっていた私は、やがて茨の途を歩かねばならない運命が待っていたのであります。

【第二部】

昭和二十二（一九四七）年春から、日本兵俘虜のヤボン・ダモイ（日本への帰還）が始まった。

わがBラーゲリからも、その殆んどが帰国の途にいたが、私たちはどうしたことか取り残された。私は私なりに、その理由を詮索してみた。

一つだけ、思い当たる節があった。

そらは文化講演で「弁証法」に触れた折、西田哲学の絶対的弁証法の立場に立って論じたが、その解説には、どうしてもヘーゲルの観念弁証法とマルクスの唯物弁証法を批判しない訳にはいかなかったのです。

その点が恐らくソ連当局へ密告され、「反動分子」という戦犯の嫌疑をかけられたと考えざるを得ません。その後、ハバロフスクで「二十五年の刑罰」を宣告される遠因になったことは、ほぼ確実です。その具体的内容については、のちに申し述べます。

再びカザン、そしてハバロフスクへ

さて、私どもが、このBラーゲリを後にしたのは昭和二十三年七月のこと。近くのエラプカ港から乗船してボルガ河を溯り、翌日夕刻に古都のカザン港に上陸。このカザンの町はソ連西部、タタール自治共和国の首都で、ボルガ河中流に沿い、人口は約百万の工業都市です。

ここには、トルストイ(思想家・作家)やレーニンの学んだ有名なカザン大学があるのだが、俘虜の身の悲しさ、見学する術すべなどあるうはずもなく、ただ望見するだけでした。

当時、カザン駅には、日本ダモイの兵が各地から続々と参集。輸送列車は、例のカイコ棚。私たちは何故か、最後尾の三輛に乗せられた。不安に駆られながらも、またもや二十日間の長旅に。今度、向かったのはハバロフスクの町です。極東地方の中心部で随一の大都会、人口約六十万のきれいな町です。

このハバロフスク駅に着くと、奇妙なことが起きた。それは最後尾の三輛だけが取り残され、本隊は一路ナオトカ港へ。『汽車は出て行く、煙は残る』とは、このことです。一瞬、駄目かと眼の前が真暗になった。私たちはヤボン・ダモイではなく、単なるラーゲリの移動に過ぎなかったのです。

ハバロフスク駅から連行された収容所は「第十四分所」。着いてみて先ず驚いたのは、大書された物凄**い**ばかりのスローガンの数々で、いわく「平和の城塞・ソ同盟を強化せよ!」「ソ同盟の五カ年計画の達成に協力しよう!」

「ソ同盟スターリン万歳!」「レーニン万歳!」など、など。加えて大枠に画かれた『ソ連の神様』たちの肖像画が所狭しと並んでいるではありませんか。

これは大変な処に来てしまったな、と思うとともに今一つ。このラーゲリで指導権を掌握しているアクチブ(活動分子)は、なんと全員が二十四、五歳の見るからに血の氣の多そうな青年たち。こちらは惨めなオイボレ(老耄)集団だったので。

激しい「吊し上げ」に度肝抜かれる

案のじよう(定)、二週間ほど経つと、あの忌いまわしい『吊し上げ』が始まりました。

その情景といえば一連日連夜、飛び交う、あらん限りの罵詈はりばとう罵倒、誹謗中傷、声の弾丸の嵐あらしの中で針の筵むしろに座らせられたような心地：に度肝とぎもを抜かれ、残るのはナラク(奈落)の底に突き落とされたような空虚感だけです。

とくに「反動」のレットルを貼られた私たちの中には、リンチに近い仕打ちで生命を縮めた者も出たほど。真相もウヤムヤ(有耶無耶)、無念の裡うちに異国の丘に眠っている戦友が、今もって忘れられません。当時の一句です。

誰わかぬ 墓標の列や 雁わたる

一方では、苛酷な労働が始まった。ダワイ・ラポート（働け！働け！）は穴掘り、石積み、木材運搬など。

それも零下四十度ともなれば、いよいよ本格的な「冬將軍」の到来です。零下四十度、五十度の中での労働は、当然「死」を意味します。帰国後、聞いた話では「日本兵俘虜は零下三十度を越えた日には作業させてはならない」旨の指令がモスクワから出ていたそうです。それが敢えて無視されたのは、どういふことか（反動分子は凍死しろ、ということだろう）。

壕掘るや 冬日底には 届かざり

末枯れや 彼も囚人 石を積む

前句は私、後句は同僚のもの。このような重労働に私の体力は日に日に衰え、遂に生命にかかわる大事故に遭遇したのは、それから間もなくでした。

忘れもしない昭和二十四年二月一日、ハバロフスク駅で貨車の積み替え作業中、二つの貨車の間に挟まれ、一瞬、気を失った。通常なら「即死」するところ、奇跡的に左肩間接部の骨折で生命を拾った。この時ばかりは「神仏の御加護」と感謝したものです。急遽、ハバロフ

スク郊外の病院へ。完全な治癒を待つことなく、追われるように退院させられた。

しかし、この大怪我も、不幸中の幸いと言わねばなりません。それは、これを契機に今までの重労働から解放され、所内での掃除とか湯茶汲み、不寝番などの比較的に軽い作業に替えられたからです。それも束の間、一難去ってまた一難です。

軍事裁判で「二十五年の刑罰」を受ける

さて、私は、昭和二十五年一月に突如としてハバロフスクの裁判所に呼び出された。およそ、予期してはいたことですが。

ソ連の国内法違反の簾で、二十五年の刑罰を宣告されたのです。その理由として、私がかって所属していた部隊が諜報謀略のそれであった、というのです。この部隊での勤務内容は普通部隊と異なるものではないことから、私は強く抗弁したのですが「聴く耳持たぬ」の応対で無視され、遂に一ヶ月の収監です。監獄内での出来事は、紙幅の都合で省略せざるを得ません。出獄後に入所したのは、今度は「第六分所」。このラーゲリは、

全員がソ連で刑罰を受けた日本兵俘虜。希望を絶たれたことからくる絶望感と沈滞感が渦巻いていた。にも拘らず、嬉しかったのは、あの忌むべき「民主化運動」から開放され、一時的にしろ、自由の空気を僅かでも吸えたからです。

このラーゲリでは、腕の骨折も無視され、またも重労働です。もう一つ、忘られない事といえば、食物に対する甚だしい差別待遇でした。ソ連は「平等」の国と聞いていたのですが、実はこうです。

日々のダワイ・ラボートでノルマ（基準・割当量）を達成すれば驚くほど多量の食事が、達成しなければ、これまた「懲罰食」と呼んで極少量しか与えられない。共産国の国是「働かざる者、食うべからず」で囚人への見せしめ、人間の本能である「食欲」で懲戒しようとしたのです。

私が所属した作業班は後者で、その食事といえば、マツチ箱ほどの黒パン一切れと他に塩鮭、おかず一、二皿が付く程度です。

私は食事を受け取ると食堂では食わず、常に寝台に持ち帰り、ゆっくり時間をかけ、先ず黒パンをほんの少し

噛っては長い間舌の上で転がし、味わいながら一口ずつ嚙下（えんげ）するのです。『生命の糧』と思えばこそで、それでも食事が一日中で一番楽しい時でした。飽食・満腹の現在の日本では、到底考えられぬ貴重な体験でありました。

文字を書くこと、思索の楽しさを知る

文化とはほど遠い殺伐（さつぱつ）な雰囲気の中で「文字を書くこと」と「知的欲求の満足感」も、また終生忘れられぬ体験です。

親友Kさんは、仕事現場からセメント袋と色鉛筆を拾って帰り、前者でノートを、後者の色鉛筆は芯（しん）を削って水に溶かしインクを作った。困ったのはペン先、使い捨てを拾ってきて著みたいな棒に巻きつけて使用するのです。

Kさんはこうして、私に「何か書かないか」という。私はノートの表題に「ことばの滴」と誌して、それに随想や記憶にある先人の箴言（しんげん）を書き込むことにした。たとえば、哲人カントの「汝の意志の格率が常に、同時に普遍的立法の原理として妥当しうるように行為せよ」（第一道徳律）とか、汝の人格と他の人格とを問わず、単に手段として取り扱うことなく、目的になるように行為せよ

よ」(第二道德律)。さらに、パスカルの「人間は考える葦である」(パンセ)。また詩人リルケの「世界は広い。しかもそれが私の中に入ってくると、海のように深くなる」とか、ギリシャの哲学者ソクラテスの「汝自身を知れ」など、などです。

今一つ、親鸞しんらんの「善人なおもて往生おうじょうを遂ぐ、言わんや悪人をや」も書き込んだことを付記しておこう。

この随想ノートは何人かに回し読みされたようで「あれを読んで、やっと人間らしい心を取り戻したよ」との感想も寄せられた。このKさんは帰国後、上智大学の教授に就任、八十五歳の現在も矍鑠かくしやくとしておられ、今日なお変わらぬ友情を温めあっております。

演劇は「革命的」なものばかり

文化活動で、見逃せないものに「歌唱」と「演劇」があります。

毎朝のラポート整列(出発前)には、全員で必ず「革命歌」を合唱してから出発、往復とも、です。戦前の日本軍隊での「軍歌演習」と大差なく、従ってさほど苦痛は感じなかった。人間はなんと同様なことを繰り返すものかな、と感じながら。考えてみれば、人類は古代から

合唱したり、労働の悦びを歌い、苦痛から逃避するため、に歌い続けてきた「民謡」や「労働歌」の歴史があれば、それも当然のことだが。

一方、「演劇」の方はどうか。

演劇部の人たちは、毎日の労働の疲れも忘れて、深夜まで猛練習。やっているのは「革命的演劇」。日曜の午後には、よく、公演していた。月一回、地区本部の日本人巡回劇団も訪れて、かなり素人離れた劇を上演してくれた。若干の楽器も携帯しており、特にロシア民謡には興味を懐いた。さすが文芸・音楽の国と実感。ここでも例に洩れず、何をやっても最後は「我が国共産党は……革命的演劇こそ……人民の革命的文芸(プロレタリア)とは……」の型どおりのプロパガンダ(宣伝)用語の羅列ばかり。何と固苦しい「人民の国」「人民の生活よ」と言うのが率直な感想でありました。

再び第二十一分所、全体覆う暗いムード

私たち受刑日本兵は、今度は「第二十一分所」に全員移動。ここでは、さらにソ連各地から参集して千人を超える大集団に発展しました。このラーゲリも、今までと

同様に混沌、無秩序、そして沈滞と、全体を覆う暗いムードに包まれていた。希望のない、理想を持たぬ社会の共通の社会現象でしょう。

団長は、かつての関東軍作戦参謀、陸軍大佐の瀬島龍三氏。昭和四十年代に「(月刊)文芸春秋」社企画のシベリア抑留体験特集号で話題を集めたエリート将校。それだけに適切な指導と統率力は拔群。所内はしだいに混沌・無秩序・沈滞の集団から秩序、光明、活気へと再建が進んだ。それはまた必然的に、再び多彩な文芸活動へと進展していったのです。

その推進者の一人が、前掲誌で同じく話題を呼んだ「収容所からきた遺書」の執筆者、山本幡男はたおさん。彼もまた多彩な文才の持主で、特に力を注いでいたのが河の名をとった「アムール句会」です。秀句は常に食堂に貼り出され、特選句には短評さへ付いた。私も一回だけ顔を出し、かつてのエリブカで詠んだ次の一句が最高点で入選、これには驚いたものです。

筏いかだとく 古き河港の みぞれかな

これが機縁で入会を勧められたが、辞退した。その頃、私は「宗教問題」で瞑想に耽っており、精神的余裕など

全く無かったからです。

思索の結果、どうやら書き上げた作品は、仏教の四諦八正道の教義を内容とした「仏教の根本原理」という拙ない小論文です。先にも触れたように、収容所内での一日一日はまさに生と死、とりわけ「死」を観念せざるを得ない環境でした。人類は何千年の昔から死と取り組み、その煩惱ぼんのうから解放されようと苦悩したのである。

日本の歴史の上でも、仏教伝来(六世紀)以後、古代人の固有・原始の信仰である「神道」と渡来仏教とが習合し(いわゆる「神仏習合」)、以後、日本特有の社会と文化に大きな影響を与えたことは、ここに説くまでもないことでしょう。

「マルクスの宗教観」を批判する

私が課題意識として疑念視していたのが、このマルクスの宗教観です。これについて深刻な瞑想と思索を傾倒した結果、その結論は「否定的立場を採らざるを得ない」ということです。

すなわち、マルクスは唯物論に立脚して形而上けいじじょう(学)の宗教の存在を否定し、宗教をもって「民衆にはアヘン

(阿片)の如き存在」と論断したので。私の学問的信念は、敢えてこれを容認できず、それへの反論を試みた。マルクス理論の最大の過誤は、人類により避けては通れない人間そのものへの深い洞察を全く欠いた点にあると言わねばなりません。

私は熱い学問的確信をもって、これに挑戦しようと決意したのです。もちろん、「死」をも覚悟して。「百万人といえども吾往かん。何ぞ死を恐れんや」と。鎌倉期、元寇のとき、日蓮上人が「非戦」の旗幟きしを鮮明にして闘った姿が脳裡にあったことも否定しません。

ソ連社会の実態はどうか

ところで、マルクス主義国家の実情はどうだったのでしょうか。

私が抑留生活十二年間、この眼を通じて知見した現状のそれは、世界戦争終了の直後とはいえ、人類社会のパラダイス、桃源郷といった理想社会にはほど遠く、「一種の地獄の世界」でした。二千万人を超えるとされた囚人の群、これを収容する夥しい数のラーゲリ。その内実は、ノーベル文学賞受賞のソ連作家、ソルジュニーツイ

ン氏の著書『収容所列島』に赤裸せきら々に描写されている通りです。

極言すれば「その国家理念は「はじめに共産主義国家、ソ連共産党ありき」です。何にもまして、両者の利益と立場が最優先され、自由や人権は片隅に追いやられ、固苦しい暗黒の社会体制だったのです。

“革命は銃口から生まれる”と説く暴力肯定の見解、一党独裁から批判者・反対者は容赦なく抹殺・粛清しゅくせいされ、親子や夫婦が互いに相手を密告したり、また異常なまでの秘密(情報非公開)主義など、など。今年度最大の社会事件「北朝鮮民主主義人民共和国の拉致らぢ問題」に、それは歴然と示されているではありませんか。

「結び」に代えて

すでに予定のページを大幅に超えました。語りたいたとは山ほど有りますが、この辺で割愛させて頂くことにしましょう。

ところで、全ソ連領からハバロフスクに集結させられた、いわゆる「戦犯抑留者」の祖国帰還が始まったのは、実に昭和二十八(一九五三)年十二月のことでした。以

後、同三十一年まで十回にわたり集団帰国があり、最終回は同三十一年十二月に実現した第十一次帰国梯団ていだんでした。私もこの梯団で、漸く祖国の土を踏むことが出来たのです。その人員は、後宮淳陸軍大将うしろく（前関東軍総司令官）を団長とする総勢一〇二五名でした。十二月二十二日、思い出深い第二ハバロフスク駅でシベリア鉄道に乗車、同二十四日にナオトカ港駅下車。同港で帰国船「興安丸」に乗船、同二十六日舞鶴港上陸。ここで十一年にも及ぶソ連抑留生活にあって、夢にも忘れられなかった念願の祖国への帰還が漸く実現したのであります。

そうして同年十二月三十日、暮れせまる郷里の小さな

駅頭に、全村挙げてと言ってもよいほど多勢の人々に迎えられて、「応召以来、実に十九年振り」に、私は再び郷里の地に降り立つことが出来たのであります。

(おわり)



〔参考資料〕

編集部

※ ソ連軍侵入前夜

昭和二十(一九四五)年八月九日深夜(午前一時半ごろ)、ソ連軍侵攻の総兵力(概要)は、およそ次のとおりであった(戦後のソ連側資料による)。

- 将兵数(後方部隊を含む) 一五七万七二五名
- 大砲・迫撃砲 二万六一三七
- 戦車・装甲車・自走砲 五五五六輛
- 戦闘機・爆撃機三四六機 ○ 海軍飛行機(掩護用)一二〇〇機

これに対して、当時の日本軍(関東軍)の諜報部隊の情報では、どの程度把握していたのであろうか。

従来の向地偵察(国境線からする常時の観察)とクーリエ(モスクワへの特使役、すなわち日本からモスクワ日本大使館へ向こう外務省の使者)の視察によって、ほぼ正確に把握していたようである。

- 総兵力 約一五〇万人 ○ 飛行機数 約五五〇〇機
- 戦車数 約四五〇〇輛

なお、付記するなら、総指揮官はスターリングラード防衛戦の勇将でソ連英雄(称号)、ワレフスキー元帥(総司令部ハバロフスク)。西方ザバイカル方面軍司令官はマリーフスキー元帥、第一極東方面

軍司令官メレツコフ元帥、第二極東方面軍司令官ブルカーエフ大將で、いずれも歴戦の將軍たちであった。(半藤一利著『ソ連が満洲に侵攻した夏』文春文庫二〇〇二年八月二〇日刊、以下同じ)

※ そして、そのとき関東軍は――

同年七月五日に策定した作戰計画にそつて、関東軍はその陣容をやつと整えつゝあつた。しかし、部隊の転用・改編による変動は激しく、予定どおりに進展せず、その焦慮と不安とは説明する言葉もないほどであつた。

それでも七月十日、青年義勇隊を含めた在滿の適齡男子約四〇万のうち、行政・警護・輸送その他の要員約十五万人ほどを除いた残り約二十五万人に「根こそぎ動員」をかける。師団長には、日本本土から予備役召集の老將軍が着任したりした。これによつて関東軍は師団三二、旅団八など「総勢七十万」に達した。戦車は合計一六〇輛、飛行機は戦闘用のもの約一五〇機であつた。

しかし、眞の戦力となると、根こそぎ動員には老兵が多く、銃剣なしの丸腰の兵が一〇万人もいた。新京では、ガリ版刷りの召集令状に「各自、必ず武器となる出刃包丁類およびビール瓶二本を携行すべし」とあつた。出刃包丁は棒にしばつて槍とし、ビール瓶はノモンハン戦争での戦訓もあり、戦車体当たり用の火焰瓶である。もつとも銃を持つ者でさえも「彈丸は一人百発」と制限されていたのである。この根こそぎ動員が辺地の開拓民や居留民にもたらしたものは、無残この上ないものとなつた。敗北はつまるところ怠惰、非現実、夢想の烙印なのであろう(前掲書)。

※ 関東軍作戦參謀 瀨島龍三中佐(当時)の横顔

ソ連參戰以前より大本營作戦課にあって「影の參謀総長」と呼ばれ期待されていたのが、本稿に登場するエリート將校、瀨島參謀その人である。彼は重臣岡田啓介や、のちの鈴木貫太郎内閣の書記官長迫水久常とは縁戚關係に當たる名門の出である。

彼は一九四四(昭和十九)年十二月から翌年二月にかけて、參謀部次長秦中將の特命を受けクーリエ(先述)としてモスクワに赴いている。何故に病氣上がりの瀨島が特に派遣されたのか。特命の内容は何だったのであろうか。

前掲書の著者(半藤一利氏)は、次のような事実を明らかにしている。当時、同僚であつた高橋參謀が戦後に書いた『回想録』の中で――(私は)昭和十九年十二月早々、関東軍參謀の内報を受けて赴任した。この際、大本營から先輩の瀨島參謀が新京總司令部まで私服で同行してくれた。日本と米英兩國との和平につきモスクワの日本大使館へソ連の斡旋を依頼する訓令を持って行った特使である。同參謀の成功を祈つて別れたが、不幸にして不成功に終わったことは皆様方ご承知のとおりであります」と。

瀨島參謀は、この事実をひた隠しにして認めようとしなない。半藤氏は「何故に隠そうとするのか。理由があるとすれば、和平実現へのソ連の仲介の勞に對しての政治的代償(南樺太・北千島の割讓、漁業權放棄、滿鉄の讓渡など)ということにならうか」と分析している。「敗戦国の恥多き歴史の事実」だからこそ、國民に對して歴史の眞実を公表すべきだ、と同氏は厳しく批判している。

※ ソ連情報局特別声明(昭和二十年九月十二日)

対日戦争の最終結果

八月九日から九月九日まで戦った戦果―日本軍の死者八万人と推定。捕獲した武器は飛行機九二五機、戦車三六九輛、野砲(自走砲)一二二六門、追撃砲一三四〇門、機関銃四八三六挺、小銃約三十万。これに対して「ソ連軍の戦死八二一九名、負傷二万三二〇四名」。ソ連軍の損失は、対ドイツ戦の規模からいえばむしろ控え目の数字であり、多くの戦史家によれば、これでも非常に誇張されていると考えられる、とする。

一方、捕虜の日本兵数に関して、同年十一月十二日発表したものによれば「兵五九万四千人以上、将官一四八人を捕虜にした」。それがさらに三年後のソ連国防省資料によれば「捕虜六〇万九一七六名、内将官および提督一四八名」になっている。もっとも、これら全員が入ソしたかどうか不明である(「前掲書」)。

―日本の厚生省調査では―

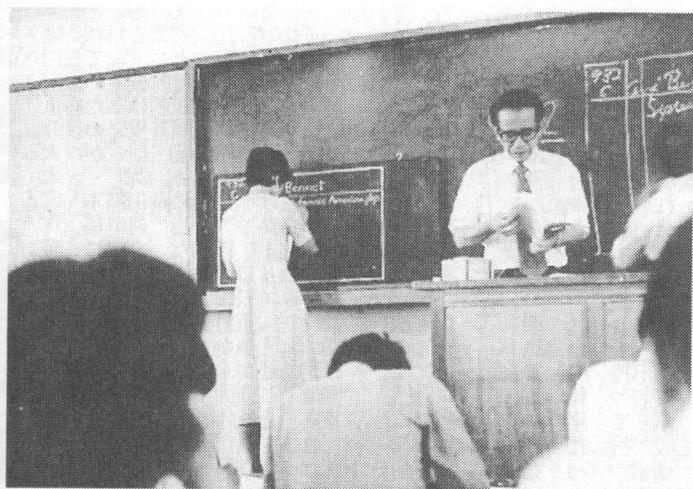
将兵五六万二八〇〇名、その他官吏・警察官・技術者など二万一千七三〇名、「総数では五七万四五三〇名」。そして無事にソ連から引き揚げてきた人数は四七万二九四二名とする。これが正確とすると、「二〇万人以上の日本人」がシベリアの土の下に眠っていることになろう、と試算している。

在留邦人(居留民・開拓民)の引き揚げについて。

満洲国政府調査によると、一九四四(昭和十九)年九月末の在住日本人は、軍人・軍属とその家族を除いて一四三万人。これに関東州(旅館・大連など)の二二万人を加えると、総計約一六五万人。

ソ連の侵攻時には一〇万人ほど少ない約一五〇万人と推定している。これらの第一陣引揚げ船はコロ島から出航、一九四六年五月一日のことである。

以後、「満蒙終戦史」によると、四六年十月までに一〇一万人、四八年八月には帰国者の数は一〇四万七〇〇〇人に達している。ほかに関東州地区からの引揚者は二二万六〇〇〇人、朝鮮半島經由の帰国者が約五万人という(以上前掲書)。



▲別府大学で講義する筆者